展示・収蔵品より

美を知る 301

県立博物館（秋田市）

「秋田風俗絵巻」の中の人々

ユニークで詳密に描く

「秋田風俗絵巻」（当館蔵）は秋田藩士で絵師でもあった荻津勝孝（1746～1809年）の作で、城下町久保田とその周辺の祭礼・行事、季節の風景を描いている。成立時期は19世紀初めごろと推測される。正月の武家屋敷前の光景に始まり、小正月のカマクラ、サイノカミ、端午の節句、夏の土崎湊など、季節の順に配された11場面からなる。細やかな人物描写に特色があり、足軽、町人、芸能者、農民たちをこれほど丹念に描いた絵画はなかなかない。

端午の節句の図（写真1）は、菖蒲の葉を編んだ縄で地面を叩く「菖蒲打ち」の様子を描く。武家屋敷の門前で、先頭の武家の子どもが力いっぱい菖蒲を打ち下ろす。門の内側では水くみ中の奉公人であろうか、ふんどし姿の男が迎え撃つかのように天秤棒を構え、左足を踏み出す。騒音を立てる悪童を、奉公人は追い返すかのように見えて、その表情は穏やかである。

両者とも頭に菖蒲を巻き、めでたい節句の時間をともに過ごしている。その様子を眺めながら、粽を携えた女性が後ろを通り過ぎる。右方の屋敷に、魔をはらう鍾馗像の幟が掲げられている。

菖蒲を振り下ろす瞬間の体の屈曲、嬉々とした子どもの表情、奉公人の体毛、盛り上がった筋肉など、詳密な描写がリアリティーを生んでいる。作者はよく人体を観察したのであろう。上に向かって吠える犬は「こんな吠え方しますよね」と言いたくなるほど、足の踏ん張り具合もよく描けている。

八幡宮祭礼の図には、警固の足軽や神職の行列が登場するが、その一人一人が異なる顔で描かれている（写真2）。祭礼行列図は珍しいものではないが、人物は類型化して簡略に描かれるのが常である（写真3）。

田植の図では、休憩する農民の姿が大きく描かれている（写真4）。女性が足から血を流しているのは、ヒルに吸われたのであろう。右の2人はキセルをくわえくつろいでいる。農作業を描く作品は数多くあるが、通例、画中の人物はみな鍬をふるい、苗を植え、精を出して作業し、このように思い思いに休む姿を前面に出したりはしない。題材は平凡だが、描きぶりがユニークである。類型・群像として処理され、ひとくくりにされがちな人々を、勝孝は個性あるものとして描いている。

地方の風俗や住民を絵の題材とすることが、他になかったわけではない。特に江戸後期になると各地の名所図会が出版され、祭礼・行事や名所の絵の中に、名もなき地方民の姿が登場する（写真5、6、7）。しかし人物は省略した線で、没個性的に描かれることが多い。見ていて楽しい絵ではあるが、風俗絵巻の前ではかすんで見えてしまう。絵巻は身辺の日常世界に、美として描く価値を見いだし、丹念に描いた逸品である。

現在開催中の企画展「秋田の宝　県指定文化財展」では、14点余りに及ぶ「秋田風俗絵巻」の全場面を公開している。普段は展示テーマに応じた場面のみ陳列するため、全体を一覧する機会はない。ぜひ足をお運びいただき、この特異な風俗画を堪能していただきたい。

（県立博物館主任学芸専門員・新堀道生）

写真1　「秋田風俗絵巻」端午の節句

写真2　「秋田風俗絵巻」八幡宮祭礼（部分）

写真3　「神田明神祭礼絵巻」（部分）　江戸後期（国立国会図書館デジタルコレクションより）

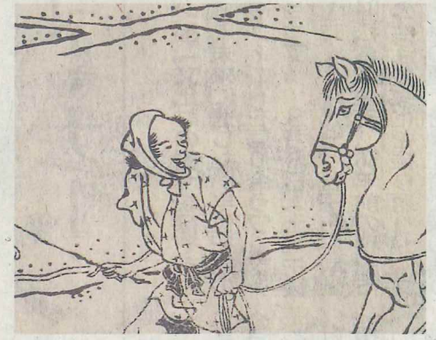

写真5　「和泉名所図会」馬子　1796（寛政8）年（国立国会図書館デジタルコレクションより）

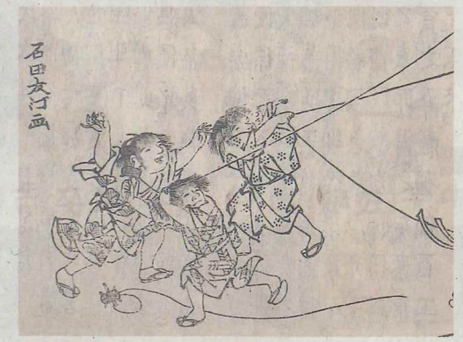

写真6　「東海道名所図会」凧あげ　1797（寛政9）年（国立国会図書館デジタルコレクションより）

写真4　「秋田風俗絵巻」田植（部分）

写真7　「河内名所図会」誉田だんじり　1801（寛政13）年（国立国会図書館デジタルコレクションより）

メモ　県立博物館企画展「秋田の宝　県指定文化財展」は4月6日まで。県指定文化財の中から、絵画、工芸品、考古・歴史資料などを紹介している。開館時間は午前9時半～午後4時（4月1日以降は4時半まで。月曜休館（祝日の場合は次の平日）。入場無料。同館☎018・873・4121